

## イザヤ書19-20章「弱くされたところにある恵み」

### 1A 主の前で衰えるエジプト 19

#### 1B 萎える国 1-15

1C 神々のわななき(宗教) 1-4

2C ナイル川の枯渇(経済) 5-10

3C 知者たちの愚かさ(学問) 11-15

#### 2B 打ち、癒す方 16-25

1C 万軍の主の救い 16-22

2C アッシリアへの大路 23-25

### 2A 海辺の民への裸のしるし 20

#### 1B アシユドデまでの足音 1-2

#### 2B エジプトとクシュの裸 3-6

## 本文

イザヤ書 19 章を開いてください。私たちはこれまで、ずっとイスラエルの周辺の国々に対する預言を見てきました。今晚で最後になります。最後の国は、エジプトです。バビロンから始まり、次にペリシテ、モアブ、それからダマスコに対して主は語られました。そしてクシュ王国に対して、主は語られました。そしてエジプトです。

イスラエルにとってのエジプト、またその周辺地域にとってのエジプトが、頼りがいのある国に見えていたかは、聖書の歴史を見てもよく分かります。創世記に戻りますが、アブラハムが飢饉のときに、カナンを離れ南に下りました。エジプトにはナイル川があるので豊かなのです。そして、ロトは、ソドムを見て、エジプトのように豊かなので、そこに住み着いたことが書かれています(13:10)。そして、ヤコブの時代は、ヨセフがエジプトに奴隷として売られて、彼はファラオの次の権力者になりました。そして世界に飢饉が起こりますが、ヤコブの息子たちが穀物を購入しにやってきます。このようにして、ナイル川によってもたらされた豊かさが、エジプトにはありました。

イスラエルは、北からのメソポタミア地域と南のエジプトの地域に挟まれていました。エジプトから、ユーフラテス川流域までに、イスラエルを中継する交易路があります。イザヤ書では「大路」と呼ばれています。そして、二つの大きな文明の勢力が衝突する戦いの場にもなります。長い歴史の中で、イザヤ亡き後のユダの国で、イスラエルとその周辺の勢力圏が、エジプトからメソポタミアのバビロンに移ります。ヨシヤ王が、カルケミシュに向かうエジプトの王ネコと戦った時のことを思い出してください。まだその時はエジプトが強かったのです。けれども、バビロンがカルケミシュでエジプトを倒して、バビロンの勢力がユダを覆います。

このように、アッシリアとエジプトの間に挟まれており、イスラエルはどちらに頼るか？という政治的判断をいつも行っていました。しかしそれは人間の目であり、神の目は違います。イスラエルは、いつもシオンにこそ救いがあるのだという、神からの励ましを受けます。私たちも、自分たちが弱い立場にいる時に、主にこそ救いがあり、助けがあるのだという励ましと、戒めを受けていますね。イスラエルは、その地理において、神により頼むように召されている民でした。アブラハムがかつてエジプトに下ってしまったように、エジプトに頼ってはいけません。

そして、エジプトは、経済についても、学問についても、また宗教的な繁栄においても、世界では超一流と言ってよかったです。しかし、その誇りだけがいつまでも残り、実情はもっとも弱くされて、歴史を追うごとに本当に弱くなっていきます。そのことも、神は預言の中で多く語られます。今読むところは、その始まりです。

## 1A 主の前で衰えるエジプト 19

### 1B 萎える国 1-15

#### 1C 神々のわななき(宗教) 1-4

<sup>1</sup> エジプトについての宣告。見よ。主は速い密雲に乗ってエジプトに来られる。エジプトの偽りの神々はその前にわななき、エジプト人の心も真底から萎える。

エジプトが主の裁きを受けるその姿は、「わななく」という言葉に代表されます。豊かで強いように見えるのですが、実際は非常に脆いということです。「速い密雲に乗って」という言葉があります。これは、突如として雲が覆い、全体を暗くしてしまう雲だそうです。したがって、アッシリが南進してくる時にたちまち、自分たちが真っ暗になってしまったと恐れる姿です。

彼らがなんでそのようなになっているのか、「偽りの神々」を拝んでいるからと言っています。エジプトは、これらの神々を誇りにしていました。エジプトに下った災いのことを思い出してください。ナイル川が血に変わりましたね。ナイル川が神と拝まれていたからです。かえる、家畜、太陽、ファラオ自身など、主がエジプトに下された十の災いは全てエジプト人が神として拝んでいたものでした。これら、自分たちの都合に合わせて頼っていた神々を、アッシリアの侵入を通して無きものに、イスラエルの神がしていられるのです。

それによって、「エジプト人の心も真底から萎える」とありますね。心の拠りどころが取られていくので、心の真底が萎えます。私たちがまことの神に会う時に、私たちの拠りどころが取られて行きます。それらは、自分たちを突き動かしていたものであり、それ自体が神のようになっていたのです。それらを取り除かれて、初めて、まことの神に会えます。

<sup>2</sup> わたしはエジプト人を駆り立てて、エジプト人にはむかわせる。彼らは、兄弟は兄弟と、友人は

友人と、町は町と、王国は王国と争い合う。

主は、彼らが不安に駆られて互いに奪い合うままにされます。自分が何に頼ればよく分からず、何が起きているのか分からない時に、私たちは主ご自身に心から叫び求めればよいのです。しかし、それをしないので、政府のせいにして、学校のせいにして、会社のせいにして、自分以外の誰かのせいにして、自分自身の問題に取り組むのを避けているのです。そのために対立が起こり、また分断や分離が起こります。

ところで、この、「兄弟は兄弟と、友人は友人と、町は町と、王国は王国と争い合う。」という言い回しですが、これはいたるところで、全面的に内部での対立が起こっている姿を言い荒らしていますね。これが、イエス様が世界的に起こることを、産みの苦しみとして語っておられます。「マタ 24:7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで飢饉と地震が起こります。」前世紀の世界大戦があり、今に至るまで対立が続いています。

<sup>3</sup> エジプトの霊は其中で衰える。わたしがその計画をかき乱すと、彼らは偽りの神々や死霊、霊媒や口寄せに伺いを立てる。

エジプトは、自分たちの霊に頼って、自分の計画はいつもその通りになると思っていましたが、そうなりません。そのようにさせているのは、主ご自身です。そこで、彼らはさらに、偽りの神々、死者の霊、霊媒、口寄せに頼っていくのです。

<sup>4</sup> わたしはエジプト人を 厳しい主人の手に引き渡す。力ある王が彼らを治める。——万軍の主、主のことば。」

神は、ここまで彼らが混乱するに任せて、それからアッシリアの支配下に彼らを置くのです。アッシリア王エサルハドンが紀元前 671 年にエジプトを攻め、そしてそこからクシュが撤退しました。664 年に首都テーベを取っています。王はエジプトを 20 の州に分け、それぞれにアッシリア人の総督を就けて「略奪し、滅ぼせ」と命じたのです。そして、ここ「厳しい主人の手」「力ある王」という表現には、かつてイスラエルを奴隷にしていたパロのことが意識されているでしょう。イスラエルをかつて奴隷として酷使した同じことを、彼らが受けている、ということです。

#### 2C ナイル川の枯渇(経済) 5-10

<sup>5</sup> 海の水は乾き、川は干上がり、涸れる。<sup>6</sup> 多くの運河は臭くなり、エジプトの川は、水かさが減って干上がり、葦や、い草も枯れ果てる。<sup>7</sup> ナイル川とその河口の水草も。その川の種床もみな涸れて、吹き飛ばされて何も無い。<sup>8</sup> 漁師たちは悲しみ、ナイル川で釣りをする者もみな嘆き、水の上に網を打つ者も打ちおれる。<sup>9</sup> 梳いた亜麻を扱う職人や 白布を織る者は恥を見、<sup>10</sup> この国の機

織人たちは砕かれ、雇われて働く者はみな心を痛める。

ナイル川が干上がる預言です。「海の水」とありますが、これは運河が多くあり、それを総称して海と言っています。この数多く流れているナイル川こそが、エジプト文明の心臓部分になります。エジプトと言えば、ナイル。これがあって、初めてエジプトと言えます。それが干上がるということは、エジプトそのものが萎えてしなびてしまうことを意味します。その裁きを神が行われます。

しかし、アッシリアがエジプトに侵攻した当時、このことが起こったという記録がないのです。しかし、この預言に近いことが前世紀に起こりました。ナイル川に造られたダムその後起こった環境破壊です。アスワン・ロウ・ダムを1901年にそしてアスワン・ハイ・ダムを1970年に建設完成させてから起こりました。

ナイル川は、毎年洪水が起こっていました。それを止めるためにダムを建設しましたが、それが大きな被害をもたらすことになりました。洪水は、実は下流に沃土と呼ばれる肥えた土を運ぶのを手伝っていました。それが無くなります。さらに、土壌中に有害な塩分があるのですが、洪水がそれまでは流し出してくれていました。それがなくなったので、塩分が土に蓄積され始めました。それで6節の言葉が起こりました。葦の根の部分にカタツムリが付くのですが、それも洪水によって流されていくものがくつついたままです。葦が枯れてしまいました。7節にあるように塩土によって農作業もできなくなりました。そして8節ですが、栄養分を含んだ土が地中海に入り込んでいたので、そこはイワシ漁で盛んでした。それが入って来なくなったので、漁業が大打撃を受けました。そして9節ですが、亜麻は育てる時に水を必要としますが、なくなるためにその産業もだめになります。このように、アスワン・ハイ・ダムの完成によってこの言葉が実現したのではないかと、思われる現象が起こったのです。

このことが終わりの日には、完全に起こるでしょう。ここに書かれているとおりになります。

### 3C 知者たちの愚かさ(学問) 11-15

<sup>11</sup> ツォアンの首長たちは全く愚か者だ。ファラオの知恵ある助言者たちも 愚かなはかりごとをめぐらす。どうして、あなたがたはファラオに向かって「私は知恵ある者の子、昔の王たちの子です」と言えるのか。<sup>12</sup> あなたの知恵ある者たちは、いったいどこにいるのか。彼らがあなたに告げ、知らせればよい。万軍の主がエジプトに何を計画されたかを。

ツォアンは、かつてのエジプトの都です。エジプトを豊かにし、栄光ある国にしていたのはナイルという天然資源の他に、学問がありました。モーセについて、ステパノはこう説明しています。「モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。(使徒7:22)」そしてソロモンの知恵の豊かさを表現するのに、列王記第一にはこう書いてあります。「ソ

ロモンの知恵は、東のすべての人々の知恵と、エジプト人のすべての知恵にまさっていた。(4:30)「知恵と言ったら、エジプトだったのです。世界の学問の基礎はここから排出されています。そうした者たちが、今のアッシリアの脅威に対して愚かなことしか話せていなかったのです。

それは、神にしかわからないこと、神のご計画だったのです。世の知恵は、今、起こっていることに対してああだ、こうだと言いますが、それが、神のご計画なのだということに、いつになったら気づくのでしょうか？

<sup>13</sup> ツォアンの首長たちは愚かになり、メンフィスの首長たちは惑わされた。自分の諸族のかしらたちが エジプトをよろめかせたのだ。

ツォアンに並び、メンフィスも都だった時があります。長いエジプトの歴史の中で、知恵においても政治においても誇り高い町でした。ですから、数々起こる出来事について、そこにいる賢い者と呼ばれる者たちは説明し、解説し、何らかの解決法を出せるはずだと思っていました。しかし、エジプトに押し寄せているアッシリアからの脅威は、そうした人の知恵を超えています。前例のないこと、彼らの知恵を超えていることなのです。

<sup>14</sup> 主がエジプトの中に 混乱の霊を吹き入れられたので、彼らは、そのあらゆる行いによって エジプトをよろめかせる。まるで酔いどれが吐きながらよろめくように。<sup>15</sup> 頭も尾も、なつめ椰子の葉も葦も、エジプト人のために、なすべきわざがない。

主は、ご自分の裁きをしばしば、酔いしれる酒の杯を飲み干す者たちに喩えられます。彼らが、主の裁きとして、知恵あると言われている者たちが混乱をきたしている状況を、酔いどれが吐きながらよろめいていると表現しておられます。

そして、頭と尾というのは、そうした首長たちの知恵と呼ばれているものと、尾は人々が霊媒に頼ったりしている姿です。どうすればよいか分からない状態になっているということです。それが、なつめ椰子の葉のように、葦のように柔らかいので全く、よりかかることができない。頼りにならないのです。なんと、神を認めない混乱した状態を、良く表しているでしょうか！

## 2B 打ち、癒す方 16-25

しかし、主はこのような裁きを下されても、実はエジプトはこのことを通して、救い主に見出されることを知っておられました。

## 1C 万軍の主の救い 16-22

<sup>16</sup> その日、エジプト人は女のようになり、万軍の主が自分たちに向かって振り上げる御手の前に、

恐れおののく。

「その日」という言葉が出ています。したがって、かつてのアッシリアがエジプトに侵攻していたという歴史的出来事を超えて、その出来事を原型として、終わりの日について究極的に行なわれることを、主は語っておられます。主がエジプトに対して御手を振り上げるということです。

<sup>17</sup> ユダの地はエジプトにとって恐怖となる。これを思い出す者はみな、万軍の主がエジプトに対して図る計画のゆえにおののく。

ユダのために、主が強く働いておられて、エジプトは主が彼らのところにおられること、自分を打つ神がおられることを知るようになるということです。これが大患難の終わりに、反キリストがエジプトまでやって来て、それからキリストが来られるというシナリオの中で起こるのでしょうか。

ただ、その予兆でもあるかのような出来事は、過去に起こっています。イスラエル建国後のエジプトです。新生イスラエルに対してアラブの大国エジプトは、四度、中東戦争を起こしました。その全てに負けています。特に 1967 年の六日戦争では、エジプトが圧倒的な武力でイスラエルを全滅させることができると当時の大統領ナセルは思っていました。ところが、イスラエル空軍がエジプトの空軍基地に駐屯している戦闘機をことごとく破壊し、シナイ半島の制空権を奪われて、エジプト軍は戦わずして負けたことが、最も屈辱的だったそうです。このように、イスラエルに味方しておられる主なる神がエジプトに近づいているかを恐れおののくわけです。そして次に驚くべき神の救いのご計画が展開されます。

<sup>18</sup> その日、エジプトの地には、カナン語を話し、万軍の主の誓いを立てる五つの町が起こる。その一つは、イル・ハ・ヘレスと言われる。<sup>19</sup> その日、エジプトの地の真ん中には主のために一つの祭壇が建てられ、その国境のそばには主のために一つの石の柱が立てられる。

エジプト全土で、何とイスラエルの神、主に対して立ち帰る出来事が起こるのです。かつて、イスラエルを虐げ、それゆえ神に裁かれたエジプトが、今は、イスラエルを救われた同じ神を自分たちの神にしていきます。

ここで「カナン語」とありますが、これはカナン地の言葉ということで、ヘブル語のことです。主を礼拝する時に、ヘブル人が使っている言語が出てくるということです。そして五つの町で万軍の主の誓いを立てますが、つまり全国的に主を礼拝する人々が起こされます。そして、真ん中に主のための祭壇とありますが、かつてヨシヤたちはカナン地の真ん中、シエケムに石の板を立てました。そして、国境のそばにも石の柱を立てますが、それはユダの国に対して、「私たちは、あなたがたの神をあがめています。」ということを示しているのです。かつて、ヨルダン川の東岸に住み

始めたマナセ半部族、ガド族、ルベン族がヨルダン川の川岸に祭壇を造ったのと同じです。

<sup>20</sup> それはエジプトの地で、万軍の主のしるしとなり、証しとなる。彼らが虐げられて主に叫ぶと、主は彼らのために戦い、彼らを救い出す救い主を送られる。<sup>21</sup> そのようにして主はエジプト人にご自分を示し、その日、エジプト人は主を知る。そしていけにえとささげ物をもって仕え、主に誓願を立ててこれを果たす。

彼らが主に叫びます。反キリストに彼らも虐げられているからでしょう、けれども救い主が来られます。キリストご自身です。

これは将来の預言ですが、その前兆というものを信じたいと思います。エジプトには、古からコプト教会と呼ばれる教派がありました。彼らはマルコがエジプトに福音を伝えたと信じています。初代教会からの殉教の精神を受け継いでいます。今年の初め、リビアでイスラム国によって斬首された若者たちもコプト教徒です。そして、他の福音派の教会なども数多く出て来ています。ムスリムの国なので迫害が厳しいですが、聖霊の力強い働きがあります。

<sup>22</sup> 主はエジプト人を打ち、打って彼らを癒やされる。彼らが主に立ち返れば、彼らの願いを聞き入れ、彼らを癒やされる。

主は打たれました。しかし、それは彼らに癒しを与えられました。これこそが、主のご目的でした。主が打たれたのは、彼らを滅ぼすためではなく、むしろ救われるためです。打つのは、彼らが自分により頼む者が、主の他にはないようにして下さるためでした。

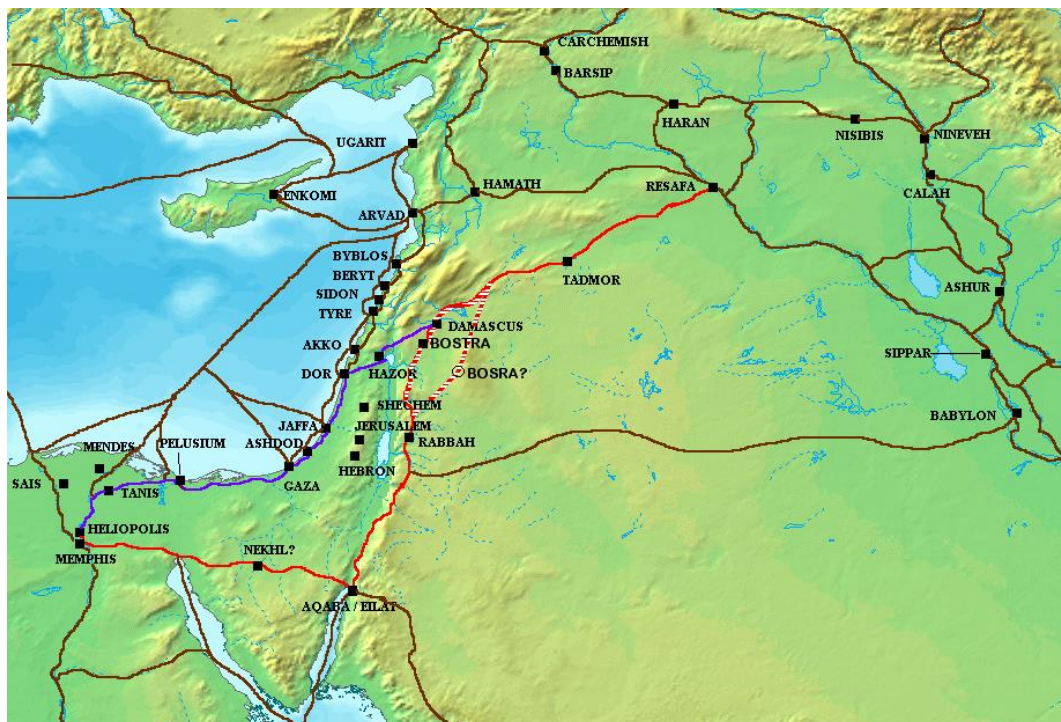
どうでしょうか？ 私たちが、エジプトのように心が萎えるという経験をしておられるのでしょうか？ 他の人たちをいろいろ、言い合った。でも罅が開かなかった、という経験があったかもしれません。そして、自分の頼りにしていた仕事、あるいは人がいなくなってしまった、ということがあるかもしれません。そして今の問題について、いろいろな専門家に当たったが、これも罅が開かなかったということもあるでしょう。けれども、それらがすべて、「わたしが主だ、わたしが救い主だ」という神からの声であったということです。打たれても、それは癒されるためなのです。

## 2C アッシリアへの大路 23-25

<sup>23</sup> その日、エジプトからアッシリアへの大路ができ、アッシリア人はエジプトに、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人はアッシリア人とともに主に仕える。<sup>2</sup>

とてつもない、回復の預言が出てきました。主イエスが再臨されて、エジプトが救われるだけでなく、アッシリアのほうにまでその救いは及びます。

先に話しましたように、エジプトの国があり、アッシリアの国があり、しかもその間に大路ができますが、そのためにこの全域が主を礼拝するところとなるのです。二つの古代文明が、かつては世そのものを表しており、何かあればイスラエルを圧迫してきました。エジプトはイスラエルを誘惑する国です。アッシリアはイスラエルを押し潰して、虐げる国です。しかし、すべてひっくり帰ります。そして、元をたどれば、エデンの園は、メソポタミアから川がアフリカ方面にも流れていくようになっています。その地域全体が、主をあがめるところへと回復します。さらには、神がアブラハムに、エジプトの川からユーフラテス川まで、その地を与えると約束されていました。



4 その日、イスラエルはエジプトとアッシリアと並ぶ第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。

イスラエルがエジプトとアッシリアの間にある国となります。そこは、辺り一面、主に仕える広範囲な領域となりますが、その中間地点のところにイスラエルがあります。そこがエジプト寄りでもなく、アッシリア寄りでもなく、むしろキリストを王とする第三の国として立っているのです。

これは、当時のユダに対して強烈な語りかけとなっていたことでしょう。なぜなら、ユダはエジプトに頼るか、それともアッシリアに屈するかのどちらかの選択だと思っていたからです。しかし、預言者イザヤは、ユダに対しても、また周囲の国々に対しても、「シオンにこそ救いがある」と伝えていました。シオンにこそ、まことの王がおられて、この方により頼む者が救われると教えていました。だから、エジプトでもなくアッシリアでもなく、第三の道があることを教えていたのです。



<sup>25</sup> 万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手で造ったアッシリア、わたしのゆずりの民イスラエルに祝福があるように。」

これは何と言ったらよいでしょうか、最も祝福を受けてはいけない人々が、祝福を受けてしまった、と言ったらよいでしょうか。エジプトとアッシリア、神の呪いと裁きを受けるに値しますが、祝福されています。そして神に反抗してきたイスラエル、こんなに神を捨てていたのであれば自分たちも捨てられて当然だったのに、神に祝福されています。まさに、「ロマ 5:20 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わる場所に、恵みも満ちあふれました。」とあるとおりです。」

## 2A 海辺の民への裸のしるし 20

イザヤは、いつも主から幻が与えられると、それが現実の生活に当てはめられるのか、応答しているのかを示すように主から促されています。ここまではっきりと、主ご自身を頼りにすれば、いずれエジプトも、アッシリアも主に仕えるようになるという確信を与えようとされたのに、それにどう応答するかという肝心のところで失敗することになります。

### 1B アシュドデまでの足音 1-2

<sup>1</sup> アッシリアの王サルゴンによって派遣されたタルタンが、アシュドデに来て、アシュドデと戦って、これを攻め取った年のこと。<sup>2</sup> 当時、主はアモツの子イザヤによって、すでにこう語っておられた。「行って、あなたの腰の粗布を解き、あなたの足の履き物を脱げ。」彼はそのようにし、裸になり、裸足で歩いていた。

サルゴン二世が紀元前 711 年に、ペリシテ人の町アシュドデを取りましたが、それから三年間、この奇妙な行動を取るようにイザヤに命じています。普通、預言は言葉を語ることによって行なわれます。けれども、聖書の中には、このような人々の注目を引き寄せるための象徴的行為を行なうことによって、預言しなさいと主が命じられるところがあります。エレミヤも少し行いましたし、預言者エゼキエルは、大変でした。左脇を下にして横たわり、390 日そうしていなければいけません。そして次に右脇を下にして横たわり 40 日そうしなければいけません。食べ物は、人の糞を燃料にして麦類を焼けと言われます。普通なら見向きもしない人々が、このへんてこなパフォーマンスを見て、さすが質問するのです。「これはどういう意味だ？」と。これが、行動によって預言を行なうことの目的です。「裸になれ」と主は命じられます。これは、すべて、素っ裸になることではなく、いわゆる今の下着は身につけていました。

### 2B エジプトとクシュの裸 3-6

<sup>3</sup> 主は言われた。「わたしのしもべイザヤが、エジプトとクシュに対するしるし、また前兆として、三年間裸になり、裸足で歩いたように、<sup>4</sup> そのように、アッシリアの王はエジプトの捕虜とクシュの捕

囚の民を、若い者も年寄りも裸にして、裸足のまま、尻をあらわにして、エジプトの恥をさらしたまま連れて行く。<sup>5</sup> 人々は、クシュを頼みとし、エジプトを誇りとしていたゆえに、打ちのめされ、また恥を見る。

クシュに対しても、エジプトに対しても主はイザヤを通して語られましたが、それを彼らは聞く耳を持ちませんでした。そこで、彼らがアッシリアにとって一部が捕え移され、惨めな姿になることをイザヤが三年かけて伝えなさいと命じられていたのです。

<sup>6</sup> その日、この海辺の住民は言う。『見よ。アッシリアの王の前から逃れようと、助けを求めて逃げて来たわれわれの拠り所がこの始末だ。われわれは、どうして助かることができるだろうか』と。」

この預言活動は、ユダの住民たちに対する警告でもありました。大事なのは、「拠り所」としていたところであります。クシュという力を頼みにしようとする者たちがユダの中にいました。またエジプトの栄えの中に潜り込めばよいと思っていた人たちがいました。それが、彼らが裸で連れて行かれるクシュ人やエジプト人を目の当たりにして、「私たちが、どうしてアッシリアの手から逃れることができようか。」と嘆いているのです。

このようにして、せっかく預言のことばが与えられているのに、今の差し迫った状況において、そのことばを聞いただけで、実践していないという問題があるのです。主は、そこで彼らが裸になって歩いている姿を見せて、自分たちが、自分たちの主によって、悪しき勢力が制されることを信じ切っていなかったのです。ここが、いつもチャレンジですね。みことばが与えられて、そうしたらそこに希望と期待を置いて待っていなければいけません。